

標註枕草絨讀本

一





佐々木弘綱標註 版權所有

標註枕草紙讀本 上編 二冊

東京書林 弦巻藏版



復のメつつこいかりくまきーうかぶひく風  
そむまて貰子のほらよまきい花雪のい  
まーり峰ーまきるあーいまのあうまれまのま  
とに火桶はるまを友まてついでいほるほまこ  
の枕のまき子よまははりーまゆらまはあま  
らうあまーままてまよまてらまーまのま  
あまといらまてまれまのままて人のん











標註枕草紙讀本目次

卷一

四季	一丁	頃ハ	一	正月一日	二
ことくちなる物	五	大進生昌	六	姫宮	九
命婦翁丸	十	節句	十四	よろこび	十四
今内裏	十五	山ハ	十五	峯ハ	十六
原ハ	十六	市ハ	十六	淵ハ	十六
海ハ	十七	わたりハ	十七	みささきハ	十七
家ハ	十七	清涼殿	十七	すさまき物	廿四
たゆまらる物	廿八	人小あたらる物	廿八	にくき物上	廿八
にくき物下	卅二	心時のきする物	卅五	過方戀き物	卅五
心ゆく物	卅六	小一條院	四十	小白川	四十一
七月むかり	四十六				



卷二

木の花ハ	一丁	池ハ	二	せちハ	三
木ハ	五	鳥ハ	七	あてなる物	九
虫ハ	十	ひろね	十	よげなき物上	十一
細殿よ	十二	主殿司こそ	十三	職の御曹子	十三
殿上の名謁	十七	よげなき物下	十八	瀧ハ	二十
川ハ	二十	橋ハ	廿一	里ハ	廿一
草ハ	廿一	集ハ	廿三	歌の題ハ	廿三
草の花ハ	廿三	覺束なき物	廿五	た〜なき物	廿五
ありがなき物	廿七	内のつぼね	廿八	一聲の秋	三十
あぢきなき物	卅一	いとほじなき物	卅二	心地よげなる物	卅二
御佛名	卅二	頭中將	卅三	物の哀れ世顔なる物	卅四
左衛門の陣	卅四	雪の山	卅五		

標註枕草紙讀本卷一

清少納言作  
源弘綱標註

四季 一段

山ハ氣ニ随ふ  
 相ある故ニ天  
 氣曇れば遠く  
 して見えぬ晴  
 り時ハ近く見  
 ゆること万葉  
 抄よいへる花  
 是るるべし

春ハ曙やうく白く成ゆく山ぎはほそ〜あり  
 てぼだも〜る雲のぬくたるびき〜る夏ハよる  
 月の比を更なりやみもさほよ〜るとびちぐひ  
 たる雨をどのふる〜つをかく秋ハ夕ぐれ夕日  
 をあやうに〜して山ぎハいとちう〜なりたる  
 小鳥のねど〜るへゆく〜とて〜川よつふるる  
 どとびゆく〜あ〜れをりま〜して雁をどめつ





ひふべきも  
あらずハハ  
ウヤウモナウ  
オモシロキケ  
シキヂヤとい  
ふさるり。

らねるがいとちいさくみゆるいとをのり。日  
つりもて。風のたつ虫のねるどいとあましな  
り。冬ハ雪のふりたるハいふべきも何れも  
るどのいと白く又さうでもいとむき火のど  
いそぎおろして。もみもてわたるさいとつきぐ  
し。ひつにふりてぬるくゆるびもてゆけむ。び  
川火をけの火も。さるきさひづらよをりぬるハ  
ワ。

ころハ

二段

正月三月。四月。五月。七月。八月。九月。十月。十二月。をぶて  
をうらつけつ。いとせせうぐさをか。

正月一日

三段

白馬を。あをう  
ま。日本紀よ  
よわり。九物至  
て白きハ必。青  
き色あひをか

正月一日ハ。まいて。うらのけしきうらくとあづ  
ら。かきみこめたるふ。せよありとある人。  
すづたか。心こもつくり。ひ。君をも。戒身を  
もいひ。むど。さ。は。こ。よ。を。の。七。日。を  
雪。の。わり。を。あ。や。う。に。つ。出。つ。れ。い。と。も  
さ。ら。の。め。ぢ。り。から。ぬ。と。ろ。も。も。て。さ。さ。ぎ。白  
馬。ん。と。て。里。人。と。ら。ま。ま。き。よ。げ。ふ。さ。く。を。見  
み。ゆ。く。中。の。御。門。の。ど。き。こ。ひ。き。い。ろ。極。が。ら  
ど。も。つ。と。ころ。よ。ま。ろ。び。あ。ひ。て。さ。く。ぐ。も。ね。ち。  
ふ。う。い。せ。ね。ば。を。れる。ど。して。わ。ら。ふ。も。又。を。う。

七

氏

二



ぬるものあり  
とぞ。  
夏はちち

女官よよろく  
らんとよむべ  
し女公人の熱  
名くと名目物  
よ見えしり。

た束のぢんぢんと殿上人あまこちちるぞ  
てとねりの馬どりをとりておどろかしてわら  
ふもどつうふえいさされたてぶとみあどの  
見ゆるにどのむらづら女官あどのゆきちが  
ひちるこそをかつけまいつづのりちる人こ  
のつをかくちちあすらすらるぞちちいやら  
らうちもえんはいとせむきおどつてどねり  
がうほのきぬもあつそれちちるものゆき  
うぬとちちいさうとにくらき庭の雪のむき  
えたる心ちいといと見ぐる馬のあがりさわ  
ぎたるもおそろくおぼゆきをひきいられて

よくも見えられた。

八日人よよろこびまうとさわぎ車のおと  
ちつねよりけうとにきこえてをう。

かゆの本ハ狭  
衣の四又がゆ  
杖とあるよお  
ふとおなりこ  
きをちちて女  
のらまうて  
ば子を姓むま  
とむひくとぞ  
古今要覧よく  
まう考證せ  
られしり。

十五日ハ女ちぢゆのせくちあろかゆの本ひき  
かくと家のどち女房むらのりかぢふをら  
たけどとよういふてつねにうらを心づうひ  
あうらうらきむをうきまにいくふあてらるお  
かあうんうちあてたうはいとらうけうありと  
うちうらひうらまいとむむぐあねつたあひ  
たうらうらやうらありあうらうらかよふむ  
このきこるどけうちへやのらほどをうらも



かもとまゝくハ  
侍達をうきよ  
て不安むのま  
まハあらば

うとふハカク  
ベツニベツダ  
ンニさどりふ  
言あり

とまゝくどころうらうらてくれハとけもいたう女  
房のれぞきおくのうさまたくすまふを希よお  
とる人も心えてわらふをあまりあくとまねき  
かくまどきまゝ思はずがほりておわどうりて  
あさまけりそくすく相とり侍くんまどいひよ  
りそくまらちてよらまあらかぎりうらふを  
とこ思もあくうらはずあいきやうづきて思みこ  
るうとふおどろくがほをこくあうみくあこ  
るもをうく又うこみよちてをここのまどをさ  
へぞういめらいうちう心よあうんがきをさ  
たちうちつう人をのろひまかぐまぐりふを

申文ハ、法國の  
守介様同様に  
を望む訴状  
あり

奏しゆへハ天  
子へ申上玉へ  
之啓しゆへハ  
皇后へ申上て

か。内とちうなごやむづこるまきまぐあハみお  
とてねてかこまりる。除目れほごまどうち  
くちうハいとさう。雪ふりうほりかどまぐ  
ふまうしふももてありく。四位五位わうらにこ  
あちよげちうハいとちめもげちう。老てか  
らまろきかどぐ。人ふとくあんかいひい女房  
のつげねふよりて。おのぐ身のかこまきよ  
ど心をやりてとき聞まをわうきんハすね  
をまろくへどいぐでうまろんよまきにそりぬ  
へけいぬへちどいいてもえくちハよくえだ  
浅めちつそいとあそれるれ



と、取次をさのむなり。

春もちりたる後、此花ハ檜柳兩説あれど、柳の花のうこよろしうろべし。程くもしくハ、怪言解よりふべし。

三月三日うらぐとのどろみてうらぐも、の花の  
いままきさたむら柳をいよきさきさ  
たれそけりやまゆふりたるこそをうられひ  
ろごりたるハみく、花も散る後、うたてぞん  
ね、しうくさきたらさつらさをまぐくをりて、お  
ほきから花がぬおさうたるこそをうら、は  
のをほいふいづうちきさくちうどみもあ  
れ、せうとの君違ふもあれ、そちうくみても  
れ、さどうちいひたういとをうら、そのわうりふ  
とりむしのひとひつきりううらうてとび  
ありく、いとをうら。

祭の比、まつりハ國々所々みあつるをねど、何の祭といそで、さまらりとのみりふハ、か後の祭もて、四月中の酉の日なり。

まつりのころぞいづうをうらき、本どのころの  
葉もぶさぐうハなりて、わうりふあをみたら  
に、くももまつりもへだてぬ、そのうらき、のな  
ら、あくそをうらふをうら、さふもさうらもりた  
つ文はうら、さるたど、志のびたるほら、き、の  
と、ほらうそら、かとおやゆらま、でたどく、まき  
をき、つけたらん、何ごちか、ません、まらりち  
かくかりて、あをらち、まら、あおをら、ものも  
も、おしまき、つ、ほも、び、の、あ、い、ま、み、か  
ど、ま、ら、ま、び、ら、ま、つ、い、ま、て、ゆ、ま、ち、ぐ、ひ、と、あ  
り、く、を、う、ら、れ、す、と、ま、ら、ま、ま、ま、ま、ま、あ、ふ



けいーくつハ  
二物ナリ故ニ  
をまげさせう  
らそさせとい  
いり。扱の鏡ハ  
まろし。

どつねよりもをうしうえゆわらつづのうーら  
びらりあしひつろひて。あかひこをえほこ  
ろびうちみぶせう。またるもあるがけいーく  
川などのをまげさせうらをさせらむとてさ  
つぎいつか其日おちしとりのまじしーりあ  
りくもさう。あねさうをどりてありくものど  
ものさうぞきたてつれづいどくちやうご  
いふ法師などのやうに。わりのほよあしをさ  
しはれほろくにつけくおねをどの女あねさ  
のとも思つてういあやしくもさう。

六つらぬ山 四段

ことくまろも  
のハ。俗よベツ  
ダンナルモノ。  
とつふころろ  
なり。  
ころろぐるー  
たれハ。キノド  
クジヤワイと  
いふさなる。  
さうドものハ。  
精進物なり。

かくらぬ山ハ。

法師のころろ。まこと女のころろ。げまの詞  
まがきらびもどあまのころろ。  
おねさう子を。法師おちたらんころろ。いせ  
心くらしきまじらひいとたのまきわをさだ  
ご本のまじらごのやうに思ひたらんころろ。いと  
いとほしけれ。さうドもの。あしきをさしひいぬ  
つをまわうきハ物もゆうかろん女さごのあ  
まあし。それをまよまからずいふ。すしてげん  
ぶあごのころろ。いとくまげなり。さうけらま  
のころらぬ山さくありくほどよおそろきあ







すうなり。  
活本よ侍らむ  
しもぞおどろ  
く人も侍らん  
とあつとよ  
ろし。おもぞハ  
カヘツテとい  
ふさなり。

門の限を言く  
作りたるハ干  
公高門の故事。  
希漢書よ見え  
たり。  
進士ハ文章生

てまうぢのりする家おつるまいつくぬ門やまあ  
らん。ええわもんたどいふほどありも。これま  
あせんとして御観やどさういふ。いせいとさう  
くこそおもしろれどてう其門せどくはく  
りてすまひさうどといへむわういて家のほ  
ど方のほどおあをせて侍らなりといらふ。これ  
ど門のうぎりをたたくつくりさう人もきこゆ  
ついとしくむあなをそらうとわどろきそこれ  
いうていこくがらとにこそ侍らあまふもきこ  
んふどお侍らむうけぬり志るべくも侍ら  
ざりけり。たましくはまうちふまかりいりみられバ。

をへ及身して  
初よりお  
う漢学生を  
いへり。  
さつぎつるハ  
とつんバ。はハ  
文字かろく心  
ゆべし。源氏野  
か子夜のいさど  
深うらんハと  
て記ゆふなり。  
とあるハ。中  
子同トと岩崎  
美隆いへり。  
あしげハ。別ノ

かうだふわきまへられ侍らとつふ。その御ま  
ちか。こからごめり。えんだうまきたまは。こ  
おらいうてさつぎつらとといへむ。雨のふり侍  
ま。あふさも侍らん。よくまとおほせうくべ  
き事もど侍らま。かりさち侍らんとていぬ。か  
ま事ど。なうりま。が。い。と。う。お。ぢ。つ。つ。は。と。と  
とせぬふ。あらむ。車けいらざりつ。つ。こと。い。ひ。侍  
つと申てお。り。ぬ。お。ぢ。つ。つ。お。ね。よ。す。む。さ。う。き。さ。ん  
と。な。ご。う。て。よ。ろ。げ。の。こ。と。も。あ。ら。ず。ぬ。ぶ。う。ら。れ  
む。み。ふ。ね。ぬ。束。の。た。の。の。の。の。の。ひ。さ。う。か。け。て。あ  
ら。ふ。の。さ。う。と。ふ。と。う。け。げ。ぬ。も。あ。う。り。う。ら。む。を。そ



一デハゴザリ  
マセヌ。ふとい  
ふさきなり。  
かれをみさう  
女の、こゑを  
一本よかれを  
みさうささぎ  
さうきとあれ  
どふわさう。  
りの、三字ハ  
衍るるべし。か  
れをみさう声  
ハ細き。  
爰マサぬ者の  
ハ爰マサぬ

れもたづねども家ゆゑあまをあんをよくと  
りてあけてうりあやうかれをみさうもの  
こゑもてぶらうんよいうとあまをたび  
りよこゑよおどろきてこれまもやうのう  
ろよたてうらうだいのひりもあらはなり。  
さうとを五寸ぞうをあげりよなりけりいみ  
ぢうをさう。さらふかやうのすきくまきさうゆ  
めふせぬもの。家よおのしましうりてむけ  
ふ心よまうすうあありとおもふまいとをか  
わがかとらなる人をわうて。かれはぬへか  
うらふんえぬものあやうをといへばかいらをも

女の、こゑハ  
ゆくと一本よ  
あるハさう  
けさうハ。拙め  
あうハさう  
うて。見證さど  
のふきさう。  
ささめハ。端を  
せんとい。  
ささよさうら  
せんハ。俗よソ  
コハマキリマ  
セウカ。あり。  
消息さうハ案  
内をすさうと

たげくえやうていさうわらふあまはさうけ  
せうふといへばあらうらうらうらうらうら  
トと定め申べきことあつてさうといへば門の  
事をこそ申つて障子あけ給へとやハいふ猶  
其るり申傳らんとさうさうらうらうらうら  
といへば。いと見告しき事。更よえおハせトと  
て笑ふめまば若き人をわけりうらとて。引たて  
ていぬらうらうら笑ふ事いみぢあけぬとあらばこ  
だまら入ねか。消息をすさうさうかありとい。誰  
かといへんと。げよをさうまきに。つとめて御前  
参りて啓さればさう事もさうさうらうらつるをよ



つふきあり。  
よべのうとハ  
千公高門のう  
をうつり。

姪宮ハ一系院  
才一の皇女侍  
母ハ中宮定子  
まり。脩子内親  
王と申す。  
あこわハかざ  
みの下よきる  
柏さればか  
びみといふべ

べのことおめで。しりよ。うらなめり。あハ  
れあれをさしたる。いひけんこそ。いとほけ  
れとさらのせたまふ。

姪宮 六段

ひめみやの沸く。これわらハべのさうぞくせさ  
まべきよ。おほせらう。に。さらハのあこめ  
うとおそひハ。何色ふつう。まつるべき。と申を。  
又さらふも。こと。も。也。姪宮のおまつ。のもの。と。  
杉いのやう。よ。て。ハ。ふくげ。ふさぶら。ん。ちうせ  
い。ま。き。ちうせい。つ。き。に。て。と。そ。よ。く。さ。ぶ  
ら。い。め。と。申。を。さ。て。こ。そ。い。う。を。お。そ。ひ。き。た。ら。わ

きを。袖のうハ  
おそひといひ  
て。さらとね  
こ  
きま。ハ。つ  
ろひを。あり  
のま。なるを  
いへり  
ちうらんハ。時  
よふうつら  
ろ。ち。て。中。回  
る。べ  
中納言ハ。生昌  
の兄。惟仲。中納  
言あり

ら。い。づ。も。ま。あり。よ。から。め。と。い。ふ。を。お。ほ。れ。い。の  
人のやう。よ。か。く。ま。い。ひ。わ。ら。ひ。そ。い。と。き。ま。く。な  
る。もの。を。い。と。ほ。げ。ふ。と。せ。い。と。語。ふ。を。さ。う。  
ちうげん。なる。を。う。み。大。進。もの。き。こ。え。ん。と。あり  
と。人の。つ。ぐ。を。き。こ。わ。て。又。さ。げ。ふ。こ。い  
ひ。て。わ。ら。ハ。ね。ん。と。ま。ん。と。お。ほ。せ。ら。う。と。い  
を。か。し。ゆ。き。て。き。け。と。の。を。ま。い。き。れ。を。と。と。出  
し。れ。バ。ひ。と。お。の。門。の。あ。と。を。申。納。言。よ。か。う。り。結  
し。か。さ。い。と。う。か。ん。と。申。さ。れ。て。い。う。で。さ。る。べ  
から。ん。を。う。ふ。た。い。ぬ。ん。志。て。中。う。け。給。ま。ん。と  
ま。ん。申。さ。れ。つ。る。と。て。又。こ。そ。を。さ。し。ひ。と。夜。め。こ



おしつてハ、辞して  
よて、三辞て  
三さりしこ  
さまんとい、惟  
仲のほや、細  
をいつり

とやい、とんと心とまき、あつれど、いまさづか  
ふ、御つぼね、ふさぶら、と志して、いぬ、まれば、  
か、つり、ま、あ、う、さ、ら、ふ、さ、て、ち、ら、ご、と、ご、と、の、路、を  
ま、れ、が、中、つ、つ、事、を、さ、ま、ん、と、ま、ね、び、け、い、志、て、わ  
ご、と、せ、う、さ、ら、し、よ、び、出、べ、き、こ、と、ふ、も、あ、る、ぬ、を、  
お、の、づ、う、ら、さ、ら、づ、お、よ、つ、ほ、ね、お、ど、に、あ、ら、ん、よ、も  
い、い、か、し、と、せ、わ、ら、へ、む、お、の、ご、と、ち、み、か、し、こ  
し、と、志、ふ、人、の、ほ、め、た、る、を、ら、ね、し、と、や、あ、ふ、と、て、  
つ、げ、志、ら、さ、ら、な、ら、ん、と、の、路、を、す、る、御、々、き、も  
いと、を、か、し、。

命婦翁九 七段

かうぶりの、叙  
齊して、五位よ  
あり、ころこ  
おと、ハ、か  
づき、ころあよ  
て、殿、とい、ん  
う、ご、し、。

うへに、さ、ぶ、ら、ふ、御、ね、こ、ハ、かうぶ、り、路、を、り、て、命  
婦、の、お、と、と、て、いと、を、か、し、け、ま、む、か、し、づ、か、せ  
路、ふ、ご、と、し、よ、出、た、ら、を、め、め、の、ら、の、う、ま、の、命、婦、あ  
る、も、さ、ら、お、い、り、ぬ、つ、と、よ、お、よ、き、か、で、日、の、さ、し  
あ、つ、り、た、ら、ふ、ら、ち、お、ぶ、り、て、あ、つ、ら、を、ね、ご、と、と  
て、お、ま、さ、ら、ま、ら、い、づ、ら、命、婦、れ、お、と、と、く、へ、とい、ふ  
み、ま、ご、と、と、と、て、志、れ、も、の、さ、し、か、し、り、た、ま、は、  
お、び、え、お、ど、ひ、て、み、ま、の、う、ち、あ、い、り、ぬ、あ、ら、が、れ  
ひ、の、ま、に、う、つ、ハ、お、も、し、ま、し、清、ら、ん、志、て、い、み、ド  
う、お、ど、ろ、う、せ、路、ふ、ね、ら、は、西、ふ、と、さ、ら、あ、い、れ、さ  
せ、路、ひ、て、を、め、の、ご、と、も、め、せ、ば、藏、人、た、ら、な、ら、あ、お

あさがれひハ、  
清涼殿の御餉  
の、あ、ま、て、天、子  
お、の、の、御、後、を  
き、ご、し、め、す、存



なり  
てうとてハ。微  
しめて。さら  
しめてこ  
さいをみてハ  
シカラレテま  
り  
うろへ  
ハ。フアンレン  
ナ。とゆが  
なり

りたるふ。此おきまらうちてう志ていぬ鳩ふ  
つかハせ。た。いまとおほせらうればあつまり  
てかりさるる。うすの命婦もさのさみてあめと  
かへてん。いとろづた。とおほせらうれば。  
か。こまりて。おきも出さぬハかり出た。  
まごちた。ておひつか。つあまれい。ど  
くゆぎありきつるものを。三月三日よ。頸弁柳  
れうづら。をせさ。せ。ゆ。の花か。にさ。せ。さ  
くら。う。ふ。せ。など。志て。あまう。せ。ひ。と  
り。か。つ。め。え。ん。と。お。ま。ひ。う。け。ん。や。と。あ。い  
れ。ぐ。ら。お。ま。の。を。り。い。か。な。ず。む。う。ひ。さ。ぶ。ら

さうぐーきハ。  
指のひとつ  
らずしてさび  
しきさき

みうハやうど  
ハ。女官ハ。兼輔  
集ま。これハ井  
で。と。つ。み。う  
も。や。う。と。よ。山  
吹。の。花。を。も。た  
せて。を。り。き。さ  
る。人。の。お。こ。せ  
う。り。た。り。つ

ふふ。さうぐ。志く。こそ。あれ。が。ど。い。ひ。く。三日。四日  
おまのぬ。ひ。つ。つ。く。犬。の。い。く。く。あ。く。こ。急。の  
さ。ま。ば。な。み。ぞ。の。た。の。か。く。ひ。さ。ま。く。さ。く。ふ。か。あ  
らん。とき。く。ふ。よ。ろ。け。の。た。ど。も。さ。う。り。さ。さ。い。と  
ぶ。ら。ひ。ふ。ゆ。く。か。さ。や。う。と。な。る。もの。さ。う。り。き。さ  
て。あ。ま。い。も。ど。た。を。蔵。人。こ。志。て。う。ち。給。ふ。志。ぬ  
べ。い。な。が。さ。せ。給。ひ。つ。つ。が。か。り。り。ま。み。り。た。つ。と  
て。さ。う。志。給。ふ。とい。ふ。心。う。乃。事。ね。お。き。を。ま。ら。な  
り。だ。ど。た。お。さ。ね。ふ。さ。ま。ん。う。つ。と。い。つ。と。せ。い  
ま。お。う。ほ。ど。に。から。う。志。く。さ。き。や。み。ぬ。志。ふ。た。れ  
バ。門。の。ほ。う。に。ひ。き。す。つ。と。い。へ。む。あ。い。れ。が。り



まどとあるけ  
り。とあるを考  
ふべし

えとーりたる  
とあるしもト  
ハ所あるべし。  
まづとみの子  
とてとら。身一  
又急用とと作  
られてあしを  
まふあり

なごもる夕つうた。いみじげふとれあさほしげ  
あるたのまびーげさつがわがきあうけをあ  
それあらう。かゝるいぬやいらのどろりえゆる  
かざいふよ。おきさるるとよとみ。よもまの  
まを。それどといひあうずといひくちくせバ。  
右道ぞえ志田りうらよととて。志もなるをすげ  
とみのうらうてめせばまありたり。これのおき  
なまらかといえせさせ給ふに似て侍まども。これ  
さゆ。まげふこそ侍らぬれ。おきさるるとよ  
べとよろこびとまうでらまのをよべとより  
こま。あらぬるありそれらうちこらうてまて侍

やみぬるの。ら  
あ。一本よな  
し。それらうし。  
ぬらうていて  
まをいさかへ  
り  
つとめてハ。そ  
次の日此程と  
やくあり

りぬとこそ中つれさう。相共の二人志てうたん  
ふと。生ぢんやと中せば。心うがらせ給ふらう  
さうておらませ。これとらまね。あゝぬものいひな  
してやみぬる。つとめさ。まげづりら。おまあり。  
はてうづまありて。はかぢみもさせてはらんず  
まを。さぶらふに。たのまらものも。あついわさ  
つを。あまれき。のふおき。あまを。いさど。う打し  
かれ。志ふらん。こそか。あし。けま。何の身ふか。此さ  
びと。ありぬらん。いり。まわ。びー。きこ。ち。志けん。  
とうち。いふ。ほど。ま。お。わ。る。い。ぬ。ふ。ひ。わ。な。  
きて。あ。み。だ。を。た。ら。お。く。お。お。と。ま。い。と。あ。さ。飯



このをうー  
きハ笑ふよも  
きららうもあ  
らびあするよ  
りふーぎふあ  
ふやうのふこ  
うへうもハ一  
柔道のきうー  
わーてうーら  
せのひ弱丸を  
足そなりーて  
ありれがーせ

いざいざこれ翁丸ふこそありはまよふはかられ  
志のびくあらなりけんとあまれうてをかしき  
うとかぎりなるし後かぢみをもうちおきてさは  
翁丸といふふひねあしていみづくちく御前よ  
もうちわらハせ孫ふんまあひあつまりてお  
近内侍あーてかくなどおほせらうまわらひ  
のあまをうへうまきうーわーてうーらせお  
いーあーてあまうーうぶるどもかゝるころ  
あつ物あかりけりとわらうせ孫あうへの女房と  
ちなどともきうーにうあひあつまりてよぶよま  
まぞたもうごうなほかほるどとれたありもれ

とまふなり  
おてうぜうせ  
どやハ含物を  
ど調けてとら  
せんとうよふ  
ふおくとせと  
まうくそねと  
ある照應る  
べー  
かーこまうハ  
馬の舎蹄のか  
ーこまうかう  
ドハ弱丸が  
うドあり

てうぜうせとねとつへむつひふいひあー  
つうなごわらうせ孫ふんだうなきうて大を  
んおのかとよわまこまあ侍らんか見え侍ら  
んとしひたれどあをゆーさるものやーとい  
まもれバさりとともつひふ足つくるをりも侍ら  
んさのみもえかくさせ孫とーといふなりさて  
のちかーこはりかうドゆうされてもよのやう  
みなりあきなるほあつれがられてあまひなき  
たかーほごうとよに志らざるをうーくあまれま  
りーか人こよまいとれてなきがごす

五節供 八段







らひ路ふ。

山ハ 十一段

よろし。中の日  
とあるハ。漢文  
よみあり  
このうれ山。百  
多喜のよみた  
がへよて名お  
二あふは  
ひとの山のむ  
ハエの語みて  
ひえの山をら  
んといふはあ  
り  
新く山。六帖。  
昔尼人。をバ  
我ハよそよん

をぐら山。みかさ山。このくれ山。まをれ山。  
いりたち山。かせ山。ひとの山。かたさう山  
こそ。誰ふおおきけらふか。とをがし。くれ。いつ  
また山。のちせの山。かさどり山。ひらの山。  
とこの山。をわが名もらす。とみうどのよまを  
給ひらん。いとをがし。いぶき山。あさくら山  
よそよん。うらん。いとをがし。き。いたた山。た  
ほひれ山。をがし。あんと。のすつりのつかひな  
ど。思ひ出らる。う。たむけ山。まこの山。いと

し。新ら山。の  
雲井。をら。か。は。  
いり。さ。ち。山。か  
た。さ。う。山。か。と  
た。め。山。ま。ど。い  
づく。こと。も。志  
られ。む。こ。れ。も  
る。祭。集。の。よ。み  
た。が。つ。る。ど。な  
る。べ。い  
いや。た。う。の。こ  
ね。い。や。た。ら。山。  
近。江。と。後。中。よ  
あり。その。名。を  
る。べ。い

をがし。おとを山。待かね山。玉さか山。耳  
なり山。末の松山。かつらき山。みのくを山。  
ほ、そ山。後山。きびの中山。嵐山。さら  
しな山。をむすて山。をくほ山。浅ま山。か  
たぐわ山。かへる山。いもせ山。  
峯ハ 十二段  
ゆづりとの峰。あさだの峰。いやたかのこね。  
原ハ 十三段  
たか原。みかの原。あしたの原。その原。と  
ぎ原。あさ川の原。なり原。うなわこが原。  
あべの原。志の原。



つむ市。五祭十  
二。宗よこひ  
さす物をつこ  
市の八十のち  
すさふあへる  
くやこれこれ  
ハ大和くみ景  
経紀は海石橋  
市ありこれハ  
尋後こ  
ふをんえてハ  
くろをんせ  
てなり

市ハ 十四段

たつの市。つむ市。ハ。やまこふあすこあつか  
かふ。長谷寺よまうづる人のかならむをこふと  
どやうければ。観音の市えんあつあやと心こと  
なり。をぶさの市。志かまの市。あまかの市。

洲ハ 十五段

かこ洲。いかさるそふの心をんえて。さる名を  
つきけんといとをかり。ないうそのふち。誰ふ  
いかさる人のをしへしならん。あをいろの洲  
こそ。またをかり。夕暮。蔵人かどの身具イふ志つて。て  
いなふち。かくれのふち。のぞきのふち。

かくれの洲。こ  
ハ百祭集。渡  
の字をなぐり  
とよめるを。か  
くれとよみ深  
て。かくれの山  
といつる類よ  
て。伊弉國石橋  
川の洲よハあ  
らざらり。  
くりずまハ。只  
須戸ふふ山  
を神ふら山と  
つふ如し。さ  
りハ遠の志よ

玉洲。

海と 十六段

水らと。よさの海。かどぐちの海。いせのう  
み。

わたうと 十七段

志かすがれ渡。こいもの渡。こりよま  
のわたう。

みささきハ 十八段

うぐひさのささき。かハむらけとささき。  
あめのみささき。

いつハ 十九段



てこ、み出に  
べきまあり  
万葉抄より大和  
又堂の岡あり  
其辺に垂仁天  
皇のみささき  
あり、これをい

ふ、や  
とうみハ、洞院  
之、清和法をせ  
がみ、とあり  
又おき  
こ一条、源尹公  
の家にて、山吹  
殿ともいへり。

近衛御門。二条一条もよし。うめ殿の宮。せ  
がみすがさののあん。れいぜい院。朱雀院。  
とうみ。小野宮。こうい。あがたのろど。  
とう三條。小六條。こいでり。

清涼殿 十段

清涼殿のうらとられす北のへだてなる御  
さうどにハ、あらうみのかた、いきたら物ども  
おそろげなる。まふがあながをぞかされた  
らうへのみつぼねの戸おしあけられむつねみ  
ぬはとゆるをふくまふとしてわらふほどに、か  
うらんの中とい、あをきかぬのときあうを悪て。

と抄にあり  
清涼子ハハの  
川も。一本よ  
を。なまうと  
よろ  
うへのみつぼ  
ねハ、后女はる  
どのまう、れが  
まゆふ時、わり  
そのれ休息、  
あり。と抄にあ  
るがごと  
大納言どのハ、  
中関白道隆公  
の所子、中宮定

さくらのいとどく。おり、ろきえごの五人どか  
りまうをいとおほくうをれば、かうらんのも  
とまでとぼれまきうらにひらつかと大納言殿  
さくらのまほの。さう、さよらかるらふ。こき  
むらまきのさぬき、志ろき御どとも。うへみこ  
きあやのいとあざやかなるをい、だててすあり  
路へり、うへのこをさおおい、ませば、戸ぐちの  
まへまうほをきいた、下きみあ、路ひて、ものなご  
そう、路ふ、みものうち、女房、さくらのからぎ  
ぬども、つろかおぬぎたれつ、ふぢやまぶき  
ふどいろく、かこのもしくあす、こもどとみの



子のほほえみ後  
又後同三句と  
なりぬへり  
くつらうにハ  
ゆるやうふん  
けとひなどを  
後言集後まひ  
らうまハけい  
ひつなどを  
くつらうを  
こゆとありさ  
る一本もある  
よやげとひよ  
てハすこーお  
ごやうなうづ

みまよりおし出たるほど目のおまゝのかさに  
おりのまわうあーおとたうけとひをどを  
をーといふ声まこゆうらくとのどかちる目の  
けーきいとをかきまふまての御むんもたる花  
くすあうておもものそうまればなかの戸より渡  
らせ給ふ御まに大納言殿まおらせぬうてあ  
まつる花のまどふかへりあ給へり宮の御ま  
のゆきちゆうおしやりてなげーのまどよ出さ  
せ給へりまどたごなまごともなくよろづおめ  
でなきをさぶらふ人もおめふ事なきこちす  
うふ月も同もかろうゆけどまひさふらみむ

月も同もか  
りゆけども  
よふまみむ  
の山のとこ  
不ば新新初  
契家へ又ま  
集まハ長結  
奇十首の中  
いれり  
古観のまみ  
れと佐らら  
ハ一条院の  
お納言ま中  
ゆめり  
不どまき同

ろの山のとつふぬるこをゆかみうちよ  
み申してあ給へりいとをかーとおおゆらげふ  
ぞもまもあまなげらるは有極あうやといせ  
んつかうまつる人のまのまどもなきめす極も  
なくわたらせ給ひぬまをまはれすまはれとお  
ほせららふめまそらふのまおてたごお  
ますをのみんたてまつれまほどまほきめも  
かちつごーまろまきまきーおーたみてこれお  
ごいおおぼえんまつまひとつげかけとおほ  
せららうとみぬ給へりこまハソかよと申せ  
ばとくかきてまおらせ給へりまのこハことくと



これらつづし  
は調きこえが  
し。柳よハホ  
よ千とせもあ  
らまふし。とま  
むらさうし中  
言うも。目をそ  
るつべしとん。  
ふまもといへ  
るを。極をきと  
ハワふよやと  
あり  
びう古今集を  
上よ。深殿の店  
の内ホよ。花が

へさぶらふづきもあらざとて。花現よりねら  
して。とくく。たが。おもひめがらさで。たう  
も。何もなふも。ふとおぼえんことを。とせめ  
させ。路ふふ。やどさ。とおく。せし。みか。と。べく。お  
めて。さへ。あか。み。く。ぞ。ね。ひ。み。だ。う。や。春の  
うた。花の。心。ち。ぞ。さ。つ。あ。く。も。上。ら。ふ。二。つ。つ  
りきて。是。ふ。と。あ。ら。ふ。可。し。あ。れ。ど。よ。そ。い。ハ  
老。ぬ。志。り。ハ。あ。れ。ど。花。を。一。見。ま。ば。物。お。ひ。も  
あ。し。と。い。ふ。こ。と。を。君。を。一。れ。を。と。か。き。あ。し  
たる。を。ゆ。ら。ん。ぶ。て。た。が。心。を。つ。ど。も。れ。ゆ。う  
かり。つ。つ。ど。と。ね。ほ。せ。ら。う。つ。いで。ふ。志。ん。ゆ。う

めよ。楊の。花。を  
さ。く。せ。の。へ。る  
を。え。て。よ。め。る。  
春。ふ。色。ハ。云。い  
と。あり  
今の。園。白。ハ。中  
今。の。御。王。中。園  
白。道。隆。公。く  
汝。の。こ。つ。は。お  
柳。よ。芳。榮。の。お  
こと。あ。れ。ど。も。  
芳。榮。よ。い。や。し。  
但。川。上。の。い。つ  
もの。花。の。い。つ  
も。く。き。ま。せ。こ

みんの。は。時。所。前。よ。て。さ。う。一。あ。う。を。い。と。ら。か  
け。と。殿。上。人。よ。ね。ほ。せ。ら。れ。け。つ。を。い。く。ど。う。か。き  
かく。と。ま。ま。ひ。中。人。と。あり。たる。さ。ら。ふ。ま。れ。あ。し  
さ。よ。さ。歌。の。を。り。ふ。あ。と。さ。う。ん。を。も。志。ら。と。と  
ね。ほ。せ。ら。れ。く。れ。を。わ。び。て。み。ふ。か。き。け。つ。中。ふ。只  
いまの。園。白。殿。の。三。位。の。中。將。と。望。え。ら。る。時。  
「志。ほ。の。さ。う。づ。ぐ。も。の。う。ら。れ。い。つ。も。く。君。を  
ば。ふ。く。お。も。ふ。と。や。ま。が。と。い。ふ。う。た。の。は。志。を。  
た。の。む。も。わ。わ。の。と。か。き。路。へ。り。々。々。を。さ。ん。い。み  
志。く。め。で。さ。せ。路。ひ。く。々。と。お。ほ。せ。ら。ら。く。も。さ。う  
る。ふ。あ。せ。あ。ゆる。心。ち。ぞ。志。ける。わ。か。う。らん。人。を。



がせこときく  
げめやもとあ  
る奇の務候せ  
るよや  
あいなくハム  
サト。ラチモナ  
ク。まどのふあ  
あり

宰相の君ハ中  
宮の宮女よて  
上臈と見えた  
り。おく小富小  
張左大臣の庄

さもえか。くまどき。このさほよやとぞおほ  
ゆる。れい。心とよくかく人もあいかく。こあつ  
はま。れて。かき。けが。かなど。あつる。も。あり。古今  
のさう。う。を。は。ま。ふ。お。お。か。せ。路。ひ。く。歌。ど。も  
の。も。と。を。お。ほ。せ。ら。れ。て。こ。ま。が。ま。あ。い。い。う。お  
とおほせら。う。ふ。も。と。て。よ。ら。ひ。う。心。ふ。か。う。ア  
おほゆる。も。あり。げ。ふ。う。く。お。ほ。え。ど。中。出。られ  
ぬ。事。い。い。かな。う。事。が。宰相。の。君。ぞ。十。バ。か。り。ぞ  
れ。も。お。ほ。ゆ。う。か。と。ま。い。く。五。つ。六。つ。あ。ど。と。た。だ  
お。ほ。え。ぬ。う。を。ぞ。け。い。ま。べ。け。ま。ど。さ。わ。え  
け。ふ。く。お。ほ。せ。ま。を。も。え。な。く。も。て。な。す。べき。

孫とあり。左衛  
門。佐。重。輔。の。女  
なり  
村上の云。よ  
り。申。ま。の。む。う  
お。ほ。せ。ま。せ  
ぬ。ふ。あり  
小。一。条。左。大臣  
ハ。師。尹。公。よ。て  
貞。信。公。の。五。男  
あり  
一。よ。ハ。お。よ。ひ  
と。つ。よ。ハ。と。よ  
め。る。ハ。た。が。つ  
り。いち。ふ。ハ。と

といひ。くち。を。が。う。も。を。か。い。志。る。と。申。さ。ん。を  
ま。を。バ。や。が。く。よ。み。つ。け。ま。せ。路。ふ。を。さ。て。これ  
え。ま。ち。志。り。た。う。事。ぞ。か。あ。ど。か。く。つ。た。を  
く。ハ。あ。う。ぞ。と。い。ひ。を。げ。く。中。ふ。も。古。今。あ。ま。う  
か。き。う。つ。た。ま。と。ま。う。ん。と。み。る。覺。え。ぬ。べき。と  
ぞ。か。村上。の。時。時。せん。え。う。で。ん。の。女。御。と。き。こ  
え。け。う。ハ。小。一。条。の。左。大臣。殿。の。お。む。を。め。お。お。し  
お。う。これ。バ。た。ま。ま。う。と。志。り。き。こ。え。ざ。う。ん。ま。だ。ひ  
め。ぎ。み。ま。お。う。け。う。時。ち。お。と。を。れ。を。う。へ。ま  
え。う。を。路。ひ。ら。う。ハ。一。ふ。も。ま。を。あ。ら。ひ。路。へ。つ  
ぎ。ふ。も。き。ん。の。は。こ。と。を。い。か。で。人。ふ。ひ。き。ま。さん



よむべし。中一  
ふいとつふえ  
るり

内物忌めりハ  
源氏物語河海  
抄ふんもしく  
見えたり

とおぼせ。さて古今の異二十巻をこなりかべ  
らせ給もんをほがく。ゆんふとせさせ給へとな  
ん。ゆえさせ給ひら。ときう。ゆ。お。う。せ。給。ひ  
て。ほ。お。い。と。あ。り。け。る。目。古。今。を。か。く。志。て。も。て。わ  
たらせ給ひて。例をもち。ほ。ま。ち。あ。う。を。ひ。き。た。て  
させ給ひら。ま。ば。女。流。あ。や。し。と。お。ぼ。う。ら。に。ほ  
ま。う。し。を。ひ。ろ。げ。さ。せ。た。ま。ひ。て。その。ゆ。え。其  
月。お。よ。の。を。う。その。人の。よ。み。た。う。い。い。か。み  
と。同。ゆ。え。と。せ。ぬ。ふ。か。り。な。り。と。心。給。と。せ。給。ふ  
ぬ。を。う。し。ま。物。の。ひ。が。お。お。え。ま。し。忘。る。る。ま。も  
あら。ば。い。み。ど。か。ら。ぶ。ま。み。と。う。り。な。う。お。ぼ。う。

基石志て云々  
ハ。事。の。女。師。の  
見。え。ぬ。ハ。ぬ。不  
も。あ。う。バ。等。数  
を。と。う。せ。ん。と  
て。基。石。志。て。教  
と。れ。と。女。流。た  
ち。は。ま。え。つ。け  
させぬ。ゆ。え  
さ。う。う。や。が  
て。云。う。ハ。女。師  
の。さ。う。い。げ。ふ  
一。首。を。皆。中  
させぬ。ふ。り。あ  
う。う。う。ど。ん

飛。ま。ぬ。べ。し。其。か。く。お。ぼ。め。か。う。う。ぬ。ん。ふ。う。う  
み。た。う。斗。目。出。て。基。石。志。て。教。を。ま。せ。ぬ。り。ん。と。て。  
ゆ。え。と。せ。ぬ。ひ。ら。ん。ほ。ど。い。か。み。め。で。う。く。を。う。  
う。さ。う。ん。ほ。本。よ。さ。ぶ。ら。ひ。ら。ん。人。さ。う。ら。を。う。ら  
や。ま。う。ま。ま。せ。あ。て。中。さ。せ。ぬ。い。れ。ば。さ。か。う。  
や。が。て。ま。ま。ま。ま。で。な。ま。ど。い。あ。ら。ぬ。ど。ま。ま。て。ゆ。ゆ  
た。が。ふ。事。を。か。り。う。り。い。う。で。や。う。ほ。ま。さ。う。お。ぼ  
め。か。う。ひ。が。こ。と。え。付。て。を。や。ま。ん。と。ぬ。こ。さ  
ま。で。お。ぼ。う。け。う。十。巻。よ。も。あ。り。ぬ。ま。う。に。ふ。よ。う  
や。う。う。り。と。て。ゆ。さ。う。う。み。け。う。さん。ま。て。み。と。の  
ご。も。り。ぬ。ま。も。い。と。め。で。た。う。か。い。と。久。志。う。あ



けうさくハ夾  
算とらきて書  
をころあでん  
たうとさうお  
くおまて竹よ  
て他ろん抄の  
説いたがつり  
ことをまどハ  
そまのさまを  
古のまことほ  
居の親ん抄ふ  
ハ異本をもえ  
合せて内務古  
もあくと帝  
の御行りめい

りておきさせ給へるふさほこのことさうなく  
てやまんにいとろろるべうとて下の十巻をあ  
まにもあるべうとをもぞん給ひあまもさうとて  
こよひさだめんとおれとあふちかくすあり  
ておふくらすでふんよませ給ひくろされど  
つひふまけきこえさせ給はずなりみりう  
へうたらせ給うてのちかろることなんとん  
殿ふ中たてまつりけきバいごうおぼしうわ  
ぎておまぎやうなどあまこせさせ給うてそあ  
たふむうひくふんねんどくらさせ給ひくろ  
もさききく志くあまれなうことなりなどか

てことあり  
えせものいす  
べておまもぐ  
れぬさく抄云  
申ふのほおれ  
をぬりて女房  
の中く昔いさ  
やうの女市を  
とま限らむ下  
つうしもおお  
やえなどのか  
たを教家たり  
しとん

たり出させたふうへもきこてあてめでさ  
せ給ひいりてさおほくよませ給ひく我ハ三  
まき四巻ごふもえよみそととおほせらむ  
かハえせものもみなまきをかこうことあり  
けれこのごらうわうあることやいさこうゆるふ  
どお前ふさぶらふ人う人の女房れこうさゆ  
ろされたるなごまありてくちぐかいひいでな  
どあたるほどそまうとおおまふこうとなくこうを  
おぼゆまおひさきなくすあやかふえせざんえ  
ひるどみくみくらんいぶせくあまづらそ  
しくおもひやられて程さうぬべからん人のむ



内侍ハ掌侍ノ  
令子掌侍四人  
とあり尚侍典  
侍掌侍の中ノ  
ぞうこ。

ありくきハ  
ありてあわつ  
けきのあまよ  
おまど俗よア  
ワテルブシツ  
ケナぢどつあ  
さ。

上達部ハ公卿  
あり位ハ三位  
以上官ハ参議  
以上をわつあ  
をさめハひす

さあぢどこさうぢらハせせめなかのありと  
まもんせならハさまほしう。内侍をどみても志  
ぢあせぢやとこそおぢゆれみやづりへす  
らんをバあぢくさうわろきことふぢ居つら  
男こそいとみくけき。ぢふをぢまたさうぢぢか  
志かけまぐもかこきおまへをまぢめをり。上  
達部殿上人四位五位六位女房ハさうみぢいと  
ぢんぬ人ハさくさくこそはあぢめ女房ハぢん  
ぢどもそのさよりらるものどもをさあぢか  
らやうどぢぢがいらとつふまぢ。いつかそ  
れをまぢかくれたり。まぢぢらぢと。いとさ

まーともひひ  
て。いやさぢ  
をえぢふぢ  
たぢがら  
ハ元補集よみ  
がくらん。まぢ  
光をたのむぢ  
ぢぢもあぢぬ  
たみ。がら  
も。とあぢ  
考れバたひハ  
磔の古語。か  
らハ尾をり。磔  
尾の如くいや  
しき若るまべ  
し。と源重の死  
あり。

もあらぢやあらん。それもあるかぎりのハさ  
あらん。うへぢぢいとひらう。づきとあぢらふぢ  
よくからずおぼえん。らとぢぢぢ。れど内侍のま  
けるどいひて。まぢく。うら。まぢら。まぢら。ま  
つかひまどに出たぢも。おもたぢ。からぢぢ  
あら。まぢ。まぢ。あら。人ハいとよ。まぢ。まぢ  
け五せちまどい。まぢをり。まぢ。まぢ。まぢ  
びん。まぢら。ぬ事人ふとひき。まぢ。まぢ。まぢ。まぢ  
ろふくまぢ。まぢ。まぢ。

すさまどまぢもの 廿一段

ひらほゆ。犬。春のあぢら。三四月の紅梅の



すこまりき物  
ハスゴイ、フウ  
ツリナ、不真ナ  
ツキナ、あど  
つふらろこ  
ふより、女子  
の字書き、を  
まの字、

かきうて、一  
本よ、ひりた  
て、やりつる  
とあり、  
この文借丸

きぬ。ちごめがくたりたるうぶ屋。火おこさ  
ぬ火をけむびつ。うーーみたろうーかひ。  
まかせのうちつゞきふよーうませたる。かこ  
たぐへふゆきたるに、あるせぬおすーてせち  
ふんをきまらド。人の國よりおこせつる文の  
物なき京のをまこそいおもふらめども、それ  
どそれとゆへーきこをまかきあつめせふあ  
るふとをきけむよー。人のもこふつごときよ  
げふかきたて、やりつる文の、かつり事見ん、今  
はきぬらんかーとあやましくおそきとまつほご  
ふありつる文のむごびたるもたてまも、いとさ

あまべー、とも  
ト耳ごち、こ  
うへよ、てよを  
つたたがへり、  
おそき、おそ  
いとまつらど  
ふとあつべき  
ふくごめてハ、  
紙をほろくと  
まろくしてん、  
弘綱業よ、おこ  
せつり、なり、七  
字ハ、術まどべ  
し。

たまげふもちなーふくだめで、うへふひきたり  
つらきみさくきえたるを、おこせたり、おひ  
しやまざりたりとも、まろハ、物いこつてとあり  
れど、なごもてかつりたる、いとまびく、まらま  
ト、まご必くべき人のもと、ふ事をおりてまら  
ふ、ふくおとすれ、まろなりと人へ出て見る  
に、くまやどりみ入て、かかえほつと、うちおろ  
まを、いおするどとと、まろは、おっ、おまぎす  
わつり、まらまらとて、半のおぎりひき出ていぬ。  
又家ゆをとりてとりたる、まらまら、まら、まら、  
とまらまら、まらまら、まらまら、まらまら、まらまら、



あうらさまハ  
ありそねまふ  
まの居いと  
まをこひて出  
みへ  
さりまハ  
ハコノウヘモ  
ナイとりよさ  
まり

りていつまうと思ふもいとほいな。ちごめ  
めのとたうあからさまといぬるをむとむれ  
バとかくあそげなぐさめてとくこといひや  
りたうふらよひいえまあるまどとてかへお  
こせたるもさやまのこもあふむふくさわ  
りなり。女をどむうふるをとこお志ていかまら  
ん。おつくあうあふ夜少くふけて志のびやか  
に門をたけむむね少くつぶきてく出るとい  
まらにあらぬよしなきもの。あのみ志てきこ  
るこそまさまとといふ申も。かへまぐさま  
トけれ。験者の物のけてうざとていみどう志

とらやま  
どもうせて  
抄云。楊銛珠教  
るどようま  
み持せて心

ひさひより云  
と。後居云。こ  
のさまを考う  
お毛詩よ。搔頭  
跡。跡とあうよ  
目く今もす  
ら申して。こま  
りさう時。心  
かくさま

たりがほふどらやまざらどもたせて。せまご志  
み志ぼり出しよみあうれどいさ。かさりげも  
なく。ごほふもつうねを。あつめてねんどあふる  
み。男も女もあやしと思ふ。あつ時のか。さうま。でよ  
み。こう志て。さうらふつか。ま。た。ち。ね。と。て。む。い。と。り  
かへしてあまどげんや。さうちひて。い  
よりか。さ。ま。ふ。か。ら。さ。う。り。あ。げ。て。あ。く。び。を  
たのれうち志てよりふいぬ。ぢもくみつか  
さえぬ人の家。こといふ。あとききて。さ。わ。う。あ。い  
しものどものほくさうつら。か。さ。あ。な。か。ま。を  
むものども。皆あつよりきて。出入車のなが



まつり曉まで  
抄云除目の果  
る曉心外官の  
除目ハ九日よ  
り始て依之と  
江次第ハあり  
三日おこなひ  
す事あるま  
に終りの曉ま  
で有り。

まことよとの  
みけるもれハ  
そ人の父母あ  
り。

えもひまをく見え。おまうで来る供も。家もく  
とおろりつううまつり。物くい酒のみめ。あ  
あへろふらつらつ曉まで。門をく音もせむ。あや  
まると耳して。きけむ。さおふ声くして。上達  
部など皆出給ふものき。ふ膏より。さむがうわ  
ち。きをりつうげ。きをのこなど。い。ものうげ  
あ。あゆ。くるを。さ。ものども。いとひだふもえ  
と。さ。外よりきくるものども。な。ど。殿も何お  
か。から。せ。臨へる。さ。いと。い。ら。つ。よ。と。が。お。の。せ  
ん。ど。ふ。こ。そ。いと。わ。ら。ら。ど。い。ら。ふ。誠。お。た。の。み  
け。る。もの。と。い。み。ど。う。な。げ。う。と。思。ひ。た。り。つ。と。

子をどろろと  
つとめて。抄云。  
除目もて。の  
おまやく。

返せぬの下  
ふいとつみる  
し。されど。とい  
ふ。きを。さ。め  
たり。

むう。い。ぬ。が。え  
て。ハ。人。の。い。ひ

めておなりて。ひまをくをりつるものも。やうく  
ひとりふたりづ。き。さ。び。り。出。ぬ。ふ。さ。き。もの。さ  
もえ。ゆ。き。を。な。ら。な。ど。き。は。来。年。の。く。み。ぐ。を。手。を  
を。り。て。か。ぞ。つ。な。ど。して。ゆる。ぎ。あ。り。さ。た。さ。も。い  
み。ど。う。い。と。ほ。し。う。す。さ。ま。ど。げ。な。り。よ。ろ。し。う  
よ。ろ。し。う。と。思。ふ。歌。を。人。の。も。と。お。や。り。い。る。よ。返  
し。せ。ぬ。け。さ。う。お。み。い。い。か。さ。せん。それ。だ。ま。を。う  
を。か。し。う。な。ら。あ。か。つ。り。ご。と。せ。ぬ。を。心。お。し。り  
ま。又。い。わ。が。し。う。と。き。あ。か。し。き。お。よ。う。ち。あ。る  
め。き。い。る。人。の。お。の。が。つ。ま。い。と。つ。と。ま。あ。る。ま。う  
に。む。か。し。お。ぼ。え。て。ら。と。な。ら。み。を。さ。哥。よ。み。て











まらめはつと  
がひりすらめ  
よてまハ術を  
まぶし。

まきしやうひ  
まやうふにや  
うりしとこ。

くちまきま  
口まきま  
研しる人よあ

まらめはつとやうのものハ人の中をいきてみん  
とまらめをすげあまぎまてちりまらひまて  
みもまらめらまらひろめきてかりまらぬの前下  
すままくりいきてもみるかかかろあまはい  
ひごひなきまものまきまやとおもへどサよ  
ろまきまはく式部太輔駿河の前司まらひ  
がまやまら。又酒のみまあかまきままら  
ひげあまものまきまをふで一杯人ふとまら  
程のけまきいみどくふくまみゆ又のあまど  
つふまらまら身ぶつひまらかからふくちわ  
まきまらまらひまらまらてわらまらまらのかうどのま

まらめはつと  
どまら。  
かうどのハ守  
殿國の守をい  
ふまらまら。  
うまらまらま  
てまの國府ハ  
まらりてうま  
へまらまらま  
くまらまらま  
まらまらまら  
ハまらまらま  
まらまらまら  
まらまらまら

みりてまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
とまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまら。まらまらまらまらまらまらまらまら  
いひまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
かりていひまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
うまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まら。物まらまらまらまらまらまらまらまらまら  
りてまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



昔はかくお云  
うてあがらさ  
うらよわ

こそきおめ。一  
おまことお  
おのまことあり  
こそおまこと  
おまことお  
のるり。  
たをめぐらさ  
おめぐらさ

あつら。又みよかよ思びてくる所よ長あほ  
あつてさもぐふ人は見えどとまどひ出るほども  
物おつきさかりてそよらといとせらるいみど  
らふらう。いよまをまどかけたるをうちおづき  
てさうくとならしちるといとふらしもかうの  
すまおしてこいき物のうちおのまといとさる  
しそれとやをらひきあげて出入するいさうに  
あつら。又やり戸あどあつら明らもいとふく  
しおしもたぐらやうしてあくるはななりやいそ  
るあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
ぼあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
ねおたつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら

あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら  
あつらあつらあつら

たつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら



よまういゝあゝ  
うまういゝあゝ  
りてい居のうり  
てうとやめや  
わがハ御なや何  
つとどおよん  
まがごごご

まがごごご  
てあるふどハ  
むりーま婦ま  
てぬー中こ

きこめいりててうとやうちいらぬるみら  
家もてもまやづかへあよしもあつてありな  
んと思ふ人のきたるふそらねをきつるをわが  
もとふある女はど女はたこーよりきていゝいぎ  
そまーと思ひ教よひきゆるがーつるいとふと  
いゝますありのさーこえてもめさりがほふそ  
へやうなるこもいひうーろみたるいとよこ  
し。わがまらんよてあるほどまやう見し女の  
事ほめいひ出しなごせも退てほどへみけは  
ど猶ふくしあーてさーあたりたうんこを思ひ  
やらたれさうれどそれいさーもあゝぬやうもある

そるひるいゝさ  
めさるをいふと  
るひる時の頃ハ  
拾芥抄まんえこ  
り家の男さうハ  
て家の事さこ  
まのくーくハね  
くーくまて不吉  
さるこ

か。そるひる誦文さる人たうー家の男さう  
なうでい。たうーもまいたるものいとふらー。  
おらもいとふらー。きぬめしたふをどりありき  
てもたぐるやうふもさる。又たの諸聲ふるが  
まがとなきあげたふまがくまくふくし。明て  
出入とこらたてぬ人いとよこし。わのいねをと  
ころもあま女ハこれと近くもよらねばうー。そ  
のこごをバたぶわが物よまてまをひりやうま  
てうーちまいさーかま決濟事ふたがふものを  
ばざんし人をむ人も思ひたらどあやうこれ  
どこれがとがをむよまかせていふ人をまげれ



いみじきおも  
ちまろよつきて  
乳母のまはよく  
— おこさひ  
さるふのおも  
一本よよとあり  
たのめふはな  
がらよこ

日かえたるんハ  
我方へ始まるこ  
とさうくのも  
へんのやる女の  
初まてもよこさ  
あり  
後云男を  
女がこより

バ、不えいみじきおも、ちまて、事をなこさひを  
どとさるふ。

ふくきもね下 廿五段

文とバなめき人共そいふく多れせを  
のめふかきさうたる詞のふくきいさるや  
ま人のもさよあまうかこまうたさうけよ  
ろき事ぞれどわづえたらんハこうとさうく  
もとならさくふく、こそあれさうさうむ  
ひてもなめきハさどかくいあらんとかさ  
いた、中してよき人をささ中ものいさるハ  
をこふていとふく、をともさうをどわろく

ふ詞まて、男主人  
とつふるこ下男  
とさくとのさふ  
あつげよあま  
んえさうり  
あいぎやうあ  
とのハハと  
つふべき如を略  
せり。此比りの  
俗語にて、今も  
ふことさる。

つふいとさう。我つかふもねるど、わいさるの  
臨ふさどいひたさいとよく、こつもとふ侍る  
とつあもをあらせど、なときく事、そねほか  
めれ、あいぎやうなくと、こをさるめさるどい  
つバ、いさる、人もきく人もわらふ、おくらぼゆ  
れど、あまうりてうろうもさるをどい、さま  
である人もわらきさる、殿上人宰相をどを  
唯るの名をいさ、かつさ、げあらず、つ  
い、いとかこさるを、げふよくさいもど、女房の  
局るる人をさつ、あのおもと、きみさどいへ、バ、め  
づらかようれ、と思ひてほむること、どいみど







とまゝ人ハ名無  
そのみきしむ人  
ハ古今集徳港  
よそへよとてと  
まればりりか  
くすねハあま  
ひふらにあふさ  
きろふ

りともたれかを見志りてわらひそりもせん。  
とまゝ人ハ名無のありとほこそをのくも  
あるべけれ。りあくまづくおきがこげる  
を志ひてそののか。あけ遅ぬあを見ぐる  
どいそれてうちなげけきまげよあふ物  
うきふもあかんか。とね不ゆさぬきかど  
も。あまづきまやらまづさしよりてよひと  
夜いひつうこのおとろを女のみふいひい  
れなふわごまるとる。れどおびるまをバゆふや  
うなりあ。かうあげつまどあふ。やがて  
あふともふいでゆきひらの秘のおぼらかたの

見れくられて抄  
云女の見送るこ  
かやうよ名無を  
しげまうこそ女  
もえぬくらうれ  
茶のあがりの様  
うさめておぼる  
きよハ女もえお  
くらべくもまし  
とのんまり。

心付めさすハ  
心ガハナヤダキ  
ガウク心ガウダ  
ク。ちどつあをこ

らん事をもいひいでおまべり出をんハ見お  
くられてちどつりもをかかりぬべし。まこりも  
出どころあり。いとまハやかおおきてひらめき  
なちてさぬきのこ。強くひきゆひるほ。う  
へのきぬかりぎぬを神のいまくりよろづさ  
いれおび強くゆふふく。あけいいでぬる  
とてぬ人いとふく。

心ときめきさる物 廿六段

さめめのこがひ。ちごあそをさる。雨のまへわ  
たり。よきたきまのたきて。ひとりふた  
。からのかづみのおくくらき見たる。よき



おとふ別帳よ  
格別よるとつふ  
まへ

ひゝるのうまハ  
ひるをま使よ  
へうまて詩考を  
あいつといへる  
如くひいるのう  
まなるべしと終  
尾の詠く

男の車とめて物いひあなひせさせし。か  
しらあひひけさう志て。香ふ志しるきぬき  
ふ。あとお見る人をきりて心ゆるらなるほ  
をか。まつ人などある夜雨のあり風のふさ  
ゆるがさもふとぞねらるか。

さぎあかき物 廿七段

枯るあふひ。ひるをあそひのてうどふあ  
ひえびぞめさどのさいでのおへさねくさう  
しの中ふありけるを見つけたる。又をりから  
あひさふりし人の文をどのふりてつれぐさ  
目さがし出たる。こぞのうは不り。月のあか

き夜。

心ゆく物 廿八段

心ゆくハコチ  
ヨイ存分ナム子  
ガハレル。さとい  
ふさ。  
女画ハ男女の中  
を書つぎけし後  
をおの細るり。

てうむみハ重食  
まて。双六のこと  
をん。  
はそそのそへハ  
呪咀の抜まて。陰

よくかいたるをんるあ。詞をかうつぎけて  
おほかる。物見のかへさみのりこぼれて。その  
ことといとねほくらう。よくやる物の車とら  
せたは。白くきよげなるみらめくがまよ。いとほ  
そうかくべくハあらぬ筆志て文かきこる。川  
舟の下りごま。まぐろめめよくつきたる。て  
うをみふてう多くうちたる。うらりき系  
ねりあハせぐり志る。このよくつあふんや  
う志て河原よ出て。はそそのそへ志たる。よ



法師のまゝさう

これ又わたりか  
およりりかこれ  
よつかけれよつ  
けのまゝさう。

檳榔毛の車は東  
帯などの時乗用  
なる車は水は静  
なるがよきなり。

るねおきてのむ水。つれぐるさるさるいとお  
すりむつまどくあらざうともあはぬまら  
うどのきて世の中の物語此おろある事のさの  
しきまにくきもあやしきまこれおかりかま  
おかりおほやけいこおぼつかさのうど  
きよき極おかりたるいと心ゆくこちす  
社寺など小まうで物まうささる小寺おハ  
法師社にてねぎなどやうのむね思ふ極より  
もまぎていごころなりを聞く申さる。びろ  
うげいのどやかよやりたる急ぎたるいからぐ  
志く見ゆ。あどろい走らせくる人の門より渡

馬毛のまゝいとむ  
づりし和名抄又  
伊勢氏の書など  
よてん海へきん

りたるをふと見る程もさく過て供の人をのり  
走るを誰なるんと思ふこそをかりけれゆゆく  
とひささくゆけばいとわろし。牛の顔いとち  
ひさく志ろみたるが腹のこころの志も尾のをそ  
向き。馬の紫のまだらづきたる。あしげ。いと  
どく黒きが足るこのわたりるどに白きありを  
こうそいの毛ふて鬚尾などいと白きけふゆ  
ふかきともいひつべき。牛飼はおほきよてか  
みあゝ志らがふて顔のあかみてかどかど志げ  
なる。いふ志きどおんハるそやのなるよきこ  
をのこも猶もかき程はさるかこなるぞよきい



まやうくきハ切  
考らうきささり  
し雲倚美隆い  
り。  
ことり。こと  
ハマて。上ハ皆  
く。この外ハ  
皆白きり。のま  
こ。

たくこえちちハねぶさのくんと思ふ。こ  
どねりハちひくく。髪のうらさきハさ  
ころうふ聲をかうて。かこすりて物をど  
ひたさざりやう。志き。猫もうつのかざり  
くろくて。ホトハ皆さう。説経師ハ顔  
き。つとまもらへたるこそ。其とく事のたふとさ  
をねぼゆ。外目志つればふとわさう。ふに  
げさうハ。つみやうらんとおぼゆ。この詞ハ  
むべ。少しと。などのふらさきほど。こそ。か  
う此罪ハえが。のこ。と。かき出け。今ハ罪  
少。恐ろ。又たふとき事。さう。おん。おん。り

蔵人ぬり。さ  
折云。古位ハ  
四ヶ年の後巡  
よあづりて。地  
下ハぬり。さ  
く。古位ハ  
殿上。さ。五  
又成ても。蔵  
さりて。ハ。地  
お。さ  
さやう。の。ふ  
況。經。の。ま  
お。ゆ。く。

て説経をといふ所。さ。い。さ。い。き。ぬ。く。こ  
猶此罪の心。さ。い。さ。い。も。あ。ら。で。見。ゆ。蔵。人。お  
り。さ。く。昔。ハ。御。せん。さ。い。事。も。せ。も。其。年。を  
かり。うち。わたり。お。い。さ。い。て。か。げ。も。見。え。ざ。り。け  
る。今。ハ。さ。い。も。あ。ら。さ。め。蔵。人。の。五。位。と。て。そ。い  
さ。い。も。ぞ。い。さ。が。う。つ。か。へ。ど。猶。を。さ。り。つ。れ。く  
お。て。心。ひ。と。つ。ハ。い。と。さ。あ。さ。い。心。ち。ぞ。す。べ。の。め。れ  
バ。さ。や。う。の。ふ。い。さ。き。ゆ。く。を。つ。た。び。二。た。び。聞  
そ。め。つ。れ。バ。つ。ね。よ。す。う。で。ま。ほ。く。な。り。て。夏。を  
どの。いと。あ。つ。き。よ。も。か。さ。び。ら。いと。あ。さ。や。う。ふ  
う。さ。あ。あ。あ。を。あ。び。の。さ。い。ぬ。き。さ。ど。ふ。み。ち







と云ふ一うは花  
やうふふぎさ  
きさく  
いうでかさうつ  
ふふ申いどうそ  
世ふさいひ傳ふ  
る極よと心と  
めて説法もさく

てふ一をがみあつるを講師もささぐさう思ふ  
なるべしいかでかさうつこめさのりと説出さ  
る。聴回もるとたらさるべきぬかづくほどふとさ  
くてよき程よてまいつとて。車どもものうこなど  
見れこせて。これどちの事も何事ならんと覺  
ゆ。見たりたる人をばをがしと思ひ見たりぬの  
誰あらんそれよやかれよやとめを付て思ひや  
らる。こそをがしと。説經志つ。八かう志け  
りなど人いひ傳ふるふ。其人も有つや。いづら  
るど定まりていそれらる。あまりなる。なまどか  
むげよさうのぞかであらうんあやさき女ごふ

むげハ一向ふさ  
らくふをどつふ  
ささく  
つがさうぞくハ  
つがさうふさく  
ささくむささくハ  
ささく

柳云わさとい  
ふより。又ことお  
がさう  
は言法女納云の

いみづく聞あつるものをば。さればとてそめつ  
かさハ。かちありきささる人いさかりき。たまさか  
ふいつぼさうぞく。なまどかり。なまめきけ  
さうぞてこそあり。かそれも物まうでをぞせ  
し。説經をどの殊ふ多くもきかざりき。此頃其を  
りさし。出た多人のいめち長くて見ま。かハ。い  
あむのりそ志り誹謗せま。ぼだいつふ寺ふ  
けらえんハ。かうせ。がきくふまうでさる人の  
ことより。とくかへり給へ。いとさうぐ。とい  
ひたれば。もちすめをまびらふ。  
こととあてもわらる。とらさし。霞をおきて。さ



家集又載集よ  
入たり上求菩提  
の心をよめり。  
そうちう一本よ  
つねさうら家と  
ありたよ未詳。

小一条院北条  
卷の十丁ノオニ  
ミエタルヲ錯乱  
ナレバコ、ニ出  
セリ。

せふ又ハかへる物ありとかきてやりつ誠ふい  
とたふとくありれやればやがてとまりぬべく  
ぞ覚ゆるさうちうが家の人のちどかきさも忘  
ぬべし。

小一条院 廿九段

小一条院を今内裏とぞつふおもくヤを殿ハ  
清凉殿よて其北なる殿ふれとくヤハ西東ハわ  
さとのみて渡らせ給ふ常ふさうのぶくせ給ふ  
おまへハつ不されバ前載やどう急管ゆひてい  
とをさう二月十日の日のうらくと長閑よ照渡  
るふわたどの西のひさふてうへの御笛吹せ

うへハ小一条院の  
御す  
言砂ハ催す米の  
うさひ抽こ

芥つちさのん  
も赤如く心よ抽  
のかをささうけ  
ん此古奇よより  
て心よ抽の意よ  
しこのさこ

あつこよハ義經  
のさ成る

給ふたのとはの文武御笛の師よて物し給ふを  
こと笛ふさうして言砂をさうかきふせた  
まへバがさいみどりめでさうさつふもよのつ  
ねさうし御笛の師よてその事どもまどうし給  
ふべとめでたしよまのちとよあつさういで  
見とてまらるをりさどハ我身よせりつみしな  
どおやゆる事こそまらさきけさハ木エのぞ  
うよて花人よいまりよさるいみどりあさく志  
うあまバ殿よ人女房のあさくさねとぞつけたる  
そらさみつくりてさうやうのまをいりうどの  
種よぞ有らるとうさハ尾張のかねときが娘



そひさぶらひて  
ハ帝ふ言遠のそ  
ひまぬくせとま  
り。

わさうせれそ  
うしてハ帝の中  
宮の侍百ふこ  
らせのふあり。

か一条大ねハ布  
よか一条左ら  
とらうと同一人  
師忠とまり。

かそくたりたり。これをほ篇ふありせ給ふをそ  
ひさぶらひて。まほ言う吹せおそくすせえき  
さぶらハトと申せむ。いおどかさりともしき  
りなんとしてみそかよのみ吹せたまふを。あま  
よりわたうせれそ。うして。このち給なうりけ  
り。只今こそ吹めとおほせらまて。吹せたまふい  
みどらそをのし。

小白川 三十段

小白川とつふ不ら。か一条の大侍殿の法家ぞか  
し。それうて上達部けちえんのハ講志給ふよ。  
みどくめでさきううて。世の中の人の聚りゆき

おきでのでま  
よゆくよとら  
初を合れて見る  
づ。ハ格あま  
ありと英隆いへ  
り。

その限もあ  
むハ柳ハ八海の

てさく。遅からん車ハ。よるべきやうもなうとい  
へど。露とまふ急ぎたきて。げみぞ隙をうりけふ。  
ながえのうつよ又うかさねて。つどかりま  
で。あし物を聞ゆべ。六月十日。日うて。暑き事  
せ。知らぬ程なり。池の蓮を見やるのみぞ。さ  
涼しき心ちむる。花右のねと。たらをとおき奉  
りて。ハおそせぬ上達部なり。ふこあめのなほ  
さしぬき。浅黄のかさびらをぞもが。給へる。あ  
れとまび給へる。ハあをまびのさしぬき。向きハ  
かまも涼しげなり。安親の宰相なども。若やぎだ  
ちて。すべて言とき事。の限よとあらずを。かき



ちふときのみならず  
むとなり。  
三位中将美隆云こ  
こハ三位中将考の  
序物云くとつづく  
又云とてついで  
ふぞ三位中將とい  
ふハ園白殿の事と  
と標ども詞をさ  
みてまゝ文法いと  
面白く今の人々  
ハ今の園白殿を時  
ハ三位中將とまこ  
えりまゝとるこ  
べりかく簡は面白  
くハ始からぬ事  
まべては此の文章  
ハハハハハハハハ  
ろき廻つりひある  
をよ味ふべり  
△の事の如くツレ  
がとつふ詞を入れて

物見たり。ひさしのみも高く巻揚て。長押のうつ  
ふら達部。奥に白ひく長くとみ結へり。其下ふハ  
殿上人。若き公達かりさうぞく。ちほりまどもい  
とをかゝくて。みも定らざ。かゝこふたらしさ  
まよひ遊びとるもいとをかゝ。実方の兵衛の依  
あかあきらの侍従など。家のこふて。今おいで  
いりたり。まぶわらそなる。公達などいとをかゝ  
うて。おとも。かゝ目たけたる。程ふ。三位中將とい  
園白殿をぞきこえ。一番のうき。おねふ。あおの  
なほ。だあ。う。ぬき。こき。も。り。の。御。袴。ふ。と  
りたる。白き。ひと。の。いと。あ。お。か。か。る。を。き。結

きくづく。

縣益のふ。安あ。言  
よ。と。し。

ひて。あゆみ入結へる。さびかり。かろび涼。くげふ  
る中ふ。あつくと。まげ。あう。べ。き。ど。い。み。ど。う。め  
でた。と。ぞ。見。え。結。ふ。お。ね。り。お。ね。な。ど。お。ね。ハ  
か。それ。ど。唯。赤。き。紙。を。固。く。ま。う。ち。つ。か。ひ。と  
ち。結。へ。る。い。ち。で。し。う。の。い。み。ど。う。候。あ。る。ふ。ぞ。い  
と。く。く。ふ。つ。る。ま。づ。講。師。も。の。ほ。く。ぬ。程。ふ。熟。盤。ど  
も。志。て。何。ふ。か。い。あ。ら。ん。物。ま。あ。る。べ。し。よ。ち。か  
の中。納。云。の。御。あり。さ。ま。常。り。も。す。さ。り。て。清。げ  
ふ。お。も。も。る。さ。ま。ぞ。限。ま。き。や。上。達。部。の。御。名。も。ど  
かく。び。き。ま。あ。く。ぬ。を。た。れ。ふ。り。ん。と。お。し。程  
ふ。れ。バ。い。ろ。あ。ひ。と。な。く。と。い。ま。づ。く。白。ひ。あ。げ。わ



常ふい半生といふまをれどこゝハ娘鏡と俗まいふよひと〜がうやうよ用ひ〜も例も多〜んぬれ〜

事ハ一本よことむハとあり〜はよろ〜んう。

かふいづれともなき中のかさびらそ是ハ誠ふ  
只をほ〜ひとつをまきさるやうよて常ふ車の方  
を見おとせつゝ物やどいひおとせ給ふをか  
と見ぬ人まうりけんを後みきさる車れひまを  
をのりさる池ふ引寄せてたてたるを見給ひ  
て實字の君ふ人のせうそこつぎ〜いひつ  
べらんもはひとりとめせばいゝあう人ふか  
あらんえりてめてた〜ふいかがいひや  
づべきと近くみ給へるどかりいひ合せてやり  
給もん事ハきこえどいみど〜ういして車れ  
ゆ〜にあゆ〜よるを且ハ笑ひ給ふ跡のまふよ

けそうのん〜ハ  
〜ハ  
ぬかざまのん〜  
をつゝあり一本  
ふけんそうのん  
〜とあり。破渡る  
る〜

とひのん〜ハ  
かふとひのん

りていふあり。久〜くたてれば歌るどよむみや  
あ〜ん兵衛佐返〜思ひまうけよるど笑ひてい  
つ〜のかつり〜でまかんとた〜と〜達歌まで  
皆そを〜さほふ見やり給へり。ぞふけそうのん  
く〜ぞ見やり〜もをの〜う有〜をがへりごと  
き〜たるふや。か〜あゆ〜くる程ふ。痛をさ〜出  
てよひ返せば。歌るどのむどをいひあやまちて  
むのりこそよび〜く〜の〜かりつゝ程ふ。あ  
るべき事〜ハ直まづきふもあら〜物をとぞれ  
び〜たる。近くまありつくも心〜なく。いゝの  
いかふとたきもとひ給へどもいそぎ。権中納言



もとありつづき  
うよからん

人よりいけよハ  
人よりいけよハ  
てく  
なほき本をまん  
ハなわくしき  
を志ひて曲折を  
つけて、整とらた  
るまじふ

見給へばそこよりてけしきむみ申も三位中  
ねとくいへあまり有心過て志そこまふまとの  
給ふも是も唯同下事おなん侍るとつふいきこ  
ゆ藤太納言ハ人よりいけよのぞきていかゞい  
ひつるとの給ふめれが三位中將いとをほき本  
をなんけしをりためるときこえ給ふようち笑  
ひ給へば侍何となくさと笑ふ声聞えやとらん  
中納言さてよびつづされつるさきふといかゞ  
いひつる是やなふりたる事とひ給へばひさ  
しうらそ侍りつれどもともかくと侍るざり  
つまづさいまみりなんとてかへり侍るをよび

此車ハ、扱云ガの  
女車、笑ふをき  
さくん、虫々や  
うにあげいあ  
り

かさねハ、まねよ  
舞いていへ、酒  
よて、ロクニナイ  
る

てとぞ申さるれが車まらん見しうらやなど  
の給ふ程も講師のなりぬま、皆みえづまりて  
そまこのみ見る程も此車ハかいつやうふう  
せぬ、さうとだれると、只けふとめたりと見え  
て、こきいといひ、さぬふ、あさあみのおりとの  
まづつ、めうきもの、うらぎなるとして、さうみ  
り、さうや、やぐてひろげなうらちかけなど志  
たるハ、あふ人なるとふうハ、人のかさねを  
ん事よりいげふと聞えて中といふと、い  
賞ゆる、朝庭の講師清範うらさのうへもひかり  
とらたら心ちさうい、うらぎとある如、暑さのわ



まへなる車ども  
おぼほめの出る  
んとて我通り出  
べき乃の車ふ紫  
肉いふなり。

や、ハよびけ  
てつふ詞よ俗よ  
や、とつふよ同

びーきふそくしてさうまき事のくふ過す  
まどきをうらむて唯少一きいてかへりな  
んと志つるを志きさみふつどひら車れおく  
おをんめくれさいつべきかこもなうあーその  
かう果をさびうで出ることて前なる車ども  
みせうそことれバ迫くたくんうれさいやハ  
やくと引いであけく出をを見送ふいとが  
がまーきまぞんごといふおおいのんごらめさ  
へ笑ひふくむをきくといれむいらへませでせ  
ながら出れば權中納言や、まのりぬるもあ  
とてうら笑ひ臨へるぞめでつき。まも耳も

ト断とつふ後ハ  
ヨウ。

後撰意ま本院傳  
徒の奇も志よか  
けるもとも人を  
えりぐれぬを  
トとこををつね  
よとふづく。

寛和二年六月花  
山院に出るの何

とまらばあつきよまよひいで。一て五子人  
お中よいらせ給いねやうもあらた。とまこえ  
かけてかへりいでよきそのまめよりやがて  
さつる日すでたてる車のありけるが人壽り  
とも見えす。さぶてたがあまう。除まどのや  
うみてすごくねが。ありがらめぞ。とま  
ろよく。いかさる人あくん。うで志らんと同  
ひけうを聞たすひく藤大納言。なまかめぞ。この  
らん。いとよく。ゆく志き物よこそあるま。との  
たまひたることをかへけき。うて其二十日あま  
りよ。中納言の法師。なるり臨ひよ。こそあられ



所任了中納言  
義懐々法師よを  
り給ひ一町の幸  
なり。

たりたり。桜まどのちりぬるもなほうのつねる  
りや老をまらまのとだよいふづくもあゝぬ御  
ありさよよとそそみえ給ひか。

七月ばかり 三十一段

七月ぞありいみづくあつぐれぶよろづのあ  
けまづく夜もあつそふ月のころいねらまて  
いどすもいとをうしやみも又をうし有明はつら  
ふもねろりなりつとつや、かそさいたのそ  
ちかうあどわかまるたみひとひらかりそめ  
ようちさきていふ人のさちやう奥の字ふたや  
りたぞあぢきなきいふこそ つぐげも

つや、うハキレ  
イニウツクシキ  
まなり。

うらちりこのら  
んハ又あふらう  
くんよ

装束のさま又也  
あひをどのうハ  
多由義俊の装束  
板の附縁ふ装束  
扱を去られそ  
れをえて考ふべ  
し。

たつなりりハた  
そまれてあうち  
り礼記ハ佩妻と  
ある妻の字をよ  
り。

けうしちめさみんよんをいで けうなるづ  
しうき色のうらつとこくてうつハすこか  
りたまるらずばごき綾のつや、かまるがいた  
くハをえぬをがいらつめてひききてぞねうめ  
るかうぞめのひとつ紅のこまやのなるす  
のまこのまのこいと長くきぬの志こよりひ  
れらもまざとけをのなるめりそバのかさふ  
かみのつちた、なまりてゆらくかなる不ど長  
さおしそこのまきつふふといづこよりふあ  
んおろけのいもづうきりみちたるふ二あ  
のこしぬまあるかそきうのかうぞめの将衣白



まふの下草は、揺  
麻のまふの下草  
夢一あらば、  
てゆくん、  
るくも、  
んそく、  
く、  
万葉集よ、  
る、  
い、  
あ、

ききとて、おのいとつや、かゝるうらちきぬの、霧  
ふい、く、  
け、  
さ、  
ふ、  
し、  
て、  
ま、  
字、  
あ、

こよなき、  
り、  
の、  
ま、  
く、  
ふ、  
ふ、  
カ、

つが、  
も、  
れ、  
お、  
ね、  
み、  
か、  
ゆ、  
か、  
い、  
お、



かうのうハ香を  
字書して、かハよ  
不ひをり。

かうのうハ香を  
字書して、かハよ  
不ひをり。

まり近うよりくろふやと心時めきせらきていま  
はらうひきいらうとりてみるどしとらうとれ  
ぶくろ事などうちのさめ恨みまどすうにあら  
うなりて人の聲ういひをさういでぬべし霧の  
こえまんえぬほどういそぎつるふもさゆみぬ  
つこそうしうめさうれ出ぬる人もいつの程ま  
みえて花の露をうらあるよつとてあまきとえさし  
出むかうのかのいみどう志めさうよほひいとを  
しあまうけくさなき程よなれはたち出て我  
まらるるおもかくやと思ひやらうともをうかぬべし

標註枕草紙讀本卷一終



